

一景話題より・夏の水

泉鏡花作

全一章

松任より栢野水島などを過ぎて、手取川を越ゆる
までに源平島と云ふ小驛あり。里の名に因みたる、
いづれ盛衰記の一條あるべけれど、其は未だ考へず。
われ等が此の里の名を聞かや、直ちに耳の底に響き
来るは、松風玉を渡るが如き清水の聲なり。夏の水
とて、北國によく聞ゆ。

春と冬は水湧かず、椿の花の燃ゆるにも紅を解く
ばかりの雫もなし。たゞ夏至のはじめの第一日、村
の人の寝心にも、疑びなく、時刻も違へず、さら／
＼と白銀の絲を鳴して湧く。盛夏三伏の頃ともたれ
ば、影沈む緑の梢に、月の浪越すばかりなり。冬至
の第一日に至りて、はたと止む、恰も絃を斷つ如し。

周圍に柵を結ひたれど其も低く、錠はあれど鎖さ
ず。注連引結ひたる。青く艶かなる圓き石の大なる

下より溢るゝを樋の口に受けて木の柄杓を添へあり。
神業と思ふにや、六部順禮たど遠く來りて賽すとて、
一文錢二文錢の青く錆びたるが、圓き木の葉の如く
あたりに落散りしを見たり。

深く山の峽を探るに及ばず。村の往來のすぐ路端
に、百姓家の間に恰も總井戸の如くにあり。いつた
りけん、途すがら立寄りて尋ねし時は、東家の媪、
機織りつゝ納戸の障子より、西家の子、犬張子を弄
びながら、日向の縁より、人懐しげに膽りぬ。

【完】